

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 10 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21320122

研究課題名（和文） 中世・近世農・山・漁村の生業交流に関する研究

研究課題名（英文） Research on the exchanges related to daily work activities between agricultural, mountain and fishing villages

研究代表者

渡辺 尚志（WATANABE TAKASHI）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：10192816

研究成果の概要（和文）：本研究は、農・山・漁村において営まれる生業に着目し、それをおのおの独立したものと捉えるのではなく、相互の交流関係を重視して実態の解明を行ったものである。また、領主の政策や村の特質が生業のありように与えた規定性や、生業を維持するための民衆運動にも留意した。対象とした地域のうち、出羽国村山地方と信濃国松代藩領においては、生業の特質とその相互連関、および生業を取り巻く諸要因のあり方について、とりわけ顕著な研究成果をあげることができた。

研究成果の概要（英文）：This research is focused on the daily work activities taking place in agricultural, mountain and fishing villages; by putting emphasis on their mutual exchanges and not on each of them separately, it uncovers the real aspect of those activities. In addition to this, attention has also been given to other factors such as the policies established by the fief's lord, the impact of one village's characteristics on the nature of the regulations regarding its daily work activities, or the actions taken by the population to maintain those activities. Especially striking results were obtained concerning the characteristics of the daily work activities and their mutual relationship, as well as the nature of the various factors related to those activities in the area of Murayama, province of Dewa, and in the fief of Matsushiro, province of Shinano.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2009年度 | 2,900,000 | 870,000 | 3,770,000 |
| 2010年度 | 2,300,000 | 690,000 | 2,990,000 |
| 2011年度 | 2,300,000 | 690,000 | 2,990,000 |
| 2012年度 | 2,900,000 | 870,000 | 3,770,000 |
| 総計 | 10,400,000 | 3,120,000 | 13,520,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史

キーワード：農村・生業交流・近世史

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の申請時には、中世・近世の農村史研究において、農村における文化面も含めた多様な発展、村落共同体が農民の生活を支えた積極的側面、領主に対して自己主張し

領主のあり方を規制する百姓像などが明らかにされつつあった。また、藤木久志『村と領主の戦国世界』、勝俣鎮夫『戦国時代論』の両研究以降、中世・近世の連続性を重視しつつ、移行期をトータルに捉えようとする研

究が積み重ねられていた。しかし、中世史研究者と近世史研究者との間にはまだまだ見解の相違する点も多く、同一のフィールドを対象に共同研究を行うなかで、建設的な議論を重ねていく必要があるという段階であった。

漁村研究については、後藤雅知『近世漁業社会構造の研究』のように、漁村（海付村落）の内部構造や漁獲物の流通過程を詳細に解明した研究や、高橋美貴氏の『近世漁業社会史の研究』をはじめとする一連の研究のように、資源保護の観点から漁業を論じた研究など、新たな視点からの研究が生まれており、それらをふまえて、漁村社会構造の研究と環境史研究とをどう結びつけていくかが課題となっていた。

山村については、従来漁村以上に研究が立ち遅れていたが、ようやく研究が活性化しつつあった（米家泰作『中・近世山村の景観と構造』、溝口常俊『日本近世・近代の島作地域研究』、大賀郁夫『近世山村社会構造の研究』、白水智『知られざる日本』など）。これらの重要な研究はあったが、従来の立ち遅れを挽回するまでには至っておらず、今後多くの個別研究を積み重ねていくべき段階にあった。

上述したように、中世・近世の農・山・漁村研究は着実に進展しつつあったが、そこにはなお、以下のような課題が存在していた。

第一に、農村・山村・漁村の研究がそれぞれ別個に行われていたため、農・山・漁村の相互交流にはあまり留意されていなかった。したがって、農・山・漁村それぞれの多様性に配慮しつつ、それらの相互交流を重視した村落社会像を描く必要があった。

第二に、山村・漁村史研究では、「環境史」という視角が重視されてきていたが、農村史研究では、皆無とはいえないまでも、「環境史」研究はまだ少なかった。したがって、農・山・漁村を包含した「人と自然の交流史」を構築する必要があった。

第三に、研究の進展状況には、分野・地域によって大きなばらつきがあった。農村史研究においては、史料の残存状況のよい関東・近畿地方を中心に研究が進められてきていたが、関東・近畿以外の各地にも、それぞれかけがえのない村の歴史があるのであり、それらを丹念に掘り起こして、関東・近畿の村落とも比較しつつ総合化を図る必要があった。

2. 研究の目的

前述した研究状況を前進させるための方法概念として構想したのが「生業交流」であった。農・山・漁村には、それぞれ固有の生業があり、それを遂行するために固有の社会組織が形成されていた。しかし、農・山・漁

村のいずれも、一村だけでは存立しえない。周囲の村々や都市と人・物資・資金・文化などの多様な諸側面で交流を行うことで、日々の生活を成り立たせていたのである。そこで、生業を基点とした農・山・漁村および都市の相互交流・ネットワークに着目することにした。これが、「生業交流」である。こうした発想により、農・山・漁村の個別研究をただ並べただけではなく、農・山・漁村を相互に有機的に関連させた、村落社会の全体像を描くことができると考えた。

また、「生業交流」の基点には、農・山・漁村における具体的な生業がある。それらは、いずれも自然環境に働きかけることを通じて営まれる。したがって、生業への着目は、農・山・漁村のそれぞれに固有な、人と自然との関係、社会と自然環境との関連の考察につながる。「生業交流」とは、「人と自然の交流史」であり、環境史をさらに豊かにするための概念である。

このように、「生業交流」の視角から農・山・漁村を総合的に研究することで、中世・近世村落史研究を大きく進展させようものと考えた。

したがって、本研究では、中世・近世の農・山・漁村を対象に、「生業交流」をキーワードとして、生業に基礎を置く社会関係と村々の相互交流、人と自然との「交流」（関係）の具体相を解明し、もって前近代村落社会の特質に新たな視角から光を当てることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、出羽国村山郡、信濃国松代藩領、伊豆国内浦地方、阿波国麻殖郡という4か所のフィールドを対象に、以下のような方法で研究を進めた。

(1) 出羽国村山郡については、農村を主要対象として、①農業における社会関係と生業環境のあり方、②農業生産の基礎となる土地所有のあり方、③領主支配が生業や農村生活に与えた規定性、生業と生活をめぐる百姓と領主との関係、④生業を守るために起こされた民衆運動の特質、などの諸点を重点的に解明することを目指した。

(2) 信濃国松代藩領については、農村と山村を主要対象として、①松代藩の政策が農・山村の生業と相互交流に及ぼした影響、②農・山村の生業を維持するための資金が、都市に住む町人や領主との間でどのように循環していたか、を解明することを目指した。

近世においては、生業が自給自足的に営まれることは少なく、多かれ少なかれ商品・貨幣経済との接点を有していた。そこで、藩領の内外における金の流れの全体像を解明し、それが生業に与えた影響について考察することに重点を置いた。

(3) 伊豆国内浦地方については、漁村を主要対象として、①漁業における社会関係と漁業資源保護のあり方、②漁村同士の相互交流の実態、③漁獲物の流通をめぐる周辺農村や、沼津・江戸などの都市との関係を解明することを目指した。

(4) 阿波国麻殖郡については、山村を主要対象として、①林業など山村の主要生業における社会関係と林業資源保護のあり方、②林産物の流通をめぐる周辺農村や都市との関係の解明を目指した。

そして、上記のいずれのフィールドにおいても、史料調査とフィールドワークを組み合わせ、研究を推進した。また、研究分担者・連携研究者・研究協力者間の緊密な連絡と討論を通じて、統一的な歴史像の形成を目指した。

4. 研究成果

本研究においては、出羽国村山郡と信濃国松代藩領において、とりわけ顕著な成果が得られた。

(1) 出羽国村山郡については、すでにその成果を、渡辺尚志編『東北の村の近世』（東京堂出版、2011年）として刊行した。そこで得られた成果は、以下のとおりである。

同書第一章「郷蔵保管靱の性格とその維持・運用」では、近世後期の村山郡幕府領村々の郷蔵に保管された靱の性格について、多方面から追究した。

村山地方は東北地方のなかでは商品生産が発展していたが、その結果農民層分解が進んだこともあって、飢饉の際に食糧難になる者は多く、村々にとって備荒貯穀は喫緊の課題になっていた。また、代官所でも備荒貯穀を重視して、管下の村々を統一的な方針で指導したから、備荒貯穀は一村限りの事柄ではなく、幕府領村々に共通の問題となっていた。すなわち、備荒貯穀は村を越えた地域社会を考えるうえでも重要なテーマだといえるのである。

そして、検討の結果、備荒貯穀をめぐる、村々と代官所との間の、また村内の百姓間でのせめぎ合いの具体相が明らかになった。

第二章「天保九年、出羽国村山郡幕府領の江戸廻米と郡中納惣代」では、天保九年（1838）から一〇年にかけて郡中納惣代として江戸に滞在した山家村名主山口三右衛門の政治的活動を跡づけた。

三右衛門は、江戸に滞在していた約一年間に二度にわたって、勘定奉行に駕籠訴と駆込訴を執行している。こうした越訴が、要求貫徹の手段として比較的容易に選択されていることにも驚くが、そこでの要求内容も特徴的である。

江戸までの廻米過程や江戸での一時保管中に欠損した米は、運送業者（船方）が金で

弁償することになっていたが、その際の米と金の換算を当時の江戸の米相場で行なっていたというの、三右衛門らの要求内容だった。年貢をめぐる要求とはいえ、それは幕府に対して年貢減免を願うといったオーソドックスな問題ではない。しかし、三右衛門らにとっては、越訴を繰り返しても実現する必要がある重要な要求だったのである。年貢納入をめぐるのは、年貢米が江戸に到着してからも、幕府との間のみならず、運送業者などとの間でもさまざまな問題が発生したのであり、それだけ三右衛門ら納名主の責任は重大であった。

三右衛門は、要求実現運動の過程で、全国各地の幕府領から出府してきた納名主たちと頻りに会合しており、また村山郡幕府領の代官や代官所役人とも意見交換し、指導を受けている。三右衛門は、江戸で苦労した反面、江戸に出たからこそその貴重な人脈を形成することができたといえる。このことは、惣代層が地元村々の要求を実現するためには、江戸での経験が必要だったことを示している。農村の利益実現のためには、大都市江戸での活動に通暁していることが求められたのである。

第三章「豪農の土地所持と村落」では、山口村を中心的対象として、土地所持をめぐる村と諸階層の相互関係を検討した。

村山地方は、東北地方のみならず全国的にみても地主・小作関係の展開度が高い地域だが、地主・小作関係は地主と小作人との相対で完結するものではなく、両者の間には村と百姓株が介在して複雑な権利関係が展開していた。

こうしたあり方は、地主の側からすれば、負担を百姓株保持者に肩代わりさせ、自らは負担を増大させることなく、土地所持と収益を増大させることができるというメリットがあった。しかし、その反面、そのような地主の土地所持は村の公的帳簿には記載されず、所持権を領主から保証されることもないため、不安定性を免れることはできなかった。

他方、土地を手放す百姓の側からすれば、負担が増大し経営の悪化を招く危険性が大きかったが、反面では百姓としての地位や権利が変わらず保障されるという側面もあった。

地主と百姓の双方にメリットとデメリットがあり、そこで両者が折り合いをつけたところに成立したのが複雑多様な土地所持形態だったのである。そして、村は、離れた他村の領域内にも存在する村の土地を全体として掌握し、また村に賦課される人足役を確実に果たすために、こうした土地所持形態を必要としたのである。

第四章「近世出羽国宝どう寺領における土地移動と支配」は、寺領における特徴的な支

配のありようを追究したものである。

宝どう寺領は村山地方の各村に散在し、寺領のみあって領民のいない村も多かった。宝どう寺の寺領支配からは、宗教的権威を支配に利用するなどといった寺院領主に特徴的なあり方もみとれるが、同時に、非領国地域である村山地方の領主支配の特質が極限的なかたちで表れているケースだとみることできる。

宝どう寺領を所持する他領民にとって、宝どう寺は純然たる領主とはいえず、領主と地主の中間的な存在と映っていた。宝どう寺側も、こうした状況に対して手をこまねいていたわけではなかった。文久三年(1863)には、寺領と寺領「所持」者の直接的把握が目指された。宝どう寺は、幕末にいたるまで、所領支配の再編強化の努力を続けていたのである。ただ、幕末においては、幕府領でも抜地の盛行などによって、土地所持関係の正確な把握とそれにもとづく確実な年貢徴収は困難な状況にあった。宝どう寺領でも、事情は同様であった。仮に寺領と寺領「所持」者の直接的把握が実現したとしても、寺領の零細・散在性と他領民による寺領所持という根本的問題は手つかずのままだったからである。

しかし、それでも幕末まで何とか年貢徴収を実現できたのには、宝どう寺の努力もあるが、寺領管理を請け負う支配人の存在が大きかった。支配人には、村役人や有力豪農が任じられ、彼らを中心に、領主の違いを越えて、村の土地管理と、村全体としての年貢納入が実現されていたのである。小規模領主の支配は、村の力に支えられて何とか実現していたといえる。

第五章「享和元年羽州村山一揆の再検討」では、一揆に参加した特定の個人に焦点を合わせて、そこから当時の地域社会の特質解明を行った。

第六章「慶応二年の村山騒動と観音寺村村方騒動」は、慶応二年(1866)の村山騒動の際に、観音寺村において、名主宅に保存されていた年貢・土地関係帳簿が大量に破棄されたことに注目し、その原因を天保期以降の同村における諸動向の分析を通じて明らかにした。

第五・六章の成果は、村人たちが生業を維持するために起こした民衆運動の近世的特質を解明したところにある。

なお、同書については、すでに『日本歴史』、『史学雑誌』において紹介されている。

(2) 信濃国松代藩領の研究成果は、すでに荒武賢一郎・渡辺尚志編『近世後期大名の領政機構』(岩田書院、2011年)として刊行している。そこでは、以下の諸点を明らかにした。

①郡奉行・代官とともに地方支配の担当部

局として重要な役割を果たした勘定所元々役・勘定役の機能を分析した。代官と勘定所との役割分担や勘定所役人の昇進ルートなどの基本的事実を確定したうえで、困窮農村(難澁村)への対応の仕方に的を絞った検討を行った。困窮農村に対しては、一般的な年貢減免等の措置は代官が行うが、その程度では立ち直れない極難澁村については、「引訳村」として代官支配から切り離し、勘定所において一層きめ細かい対応をしたことが明らかになった。そこに、大庄屋等の中間支配機構をもたなかった松代藩においても、地方行政がそれなりにスムーズに進んだ一要因を見出すことができた。

②松代城下の有力御用商人・八田家の経営について、文化・文政期を中心に、その全体像を明らかにするとともに、その中における金融活動の意義について追究した。

八田家の資金は、直接に、あるいは藩を通じて間接的に農村に貸し付けられていた。これを、商業資本による農村収奪とみるか、難澁村立て直しのための資金融通とみるかは今後の重要な課題となる。

③一般会計、特別会計、バランスシート等の会計学的分析手法を用いて、松代藩財政について再検討した。その結果、従来の通説であった藩財政窮乏論は見直す必要があることが明らかになった。また、地域経済と藩財政との密接な関連や、低利で資金を調達した代官が褒賞の対象となっていることなど、興味深い事実が示された。

また、藩の資金が領内の村・町に貸し付けられており、それが藩領地域経済に影響を与えていたことが示された。藩領内外にわたる流通・経済のあり方は、百姓・町人レベルをみているだけではわからないのである。今後は、藩から在地への資金提供が在地社会にとってもった意味—在地の成り立ちを支えるありがたいものだったのか、それとも望まないのに貸し付けられる迷惑なものだったのか—を考察していくことが重要な課題となる。

(3) 伊豆国内浦地方と阿波国麻殖郡については、史料調査の結果、重要史料の収集を完了した。また、フィールドワークによって幾多の新知見を得ることができた。

今後は、史料の内容分析を進め、この分野の成果は今後、論文等で発表する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計19件)

①大塚英二、史料紹介 水口宿蓮華寺に伝来した永享二年講中世話人の記録、愛知県立大学日本文化学部論集(歴史文化学科編)、査

読無、第4号、2013、1-47

②小林一岳、「武蔵国船木田荘由比郷と天野氏一二つの裁許状」、八王子市史研究、査読無、第3号、2013、2-19

③高橋美貴、問題提起 漁業史研究からみる環境史研究への展望、地方史研究、査読有、358号、2012、58-61

④池上裕子、天正十九年都筑郡岡上村検地帳を読む(1)、都筑・橘樹地域史研究、査読無、2012、27-40

⑤池上裕子、中・近世移行期を考える、駒澤大学大学院史学論集、査読無、第42号、2012、1-18

⑥山崎圭、近世北信濃の地主小作相論と幕府代官、中央史学、査読有、35号、2012、66-83

⑦大塚英二、近江国水口宿蓮花寺所蔵「宿村庄屋家業覚書」について、愛知県立大学日本文化学部論集、査読無、3号、2012、1-13

⑧大塚英二、延宝七年江州甲賀郡美濃部水口村古城廻御検地帳抜書、愛知県立大学国際文化研究科論集、査読無、3号、2012、23-36

⑨渡辺尚志、中世・近世移行期村落史研究の到達点と課題、日本史研究、査読無、585号、2011、113-135

⑩大塚英二、近世初期有力竈屋の存在形態—瀬戸竈屋三右衛門と三河石飛村伊藤家—、豊田市史研究、査読無、2号、2011、19-30

⑪大塚英二、尾張藩御小納戸役所貸付金と津島村有力百姓、愛知県立大学日本文化学部論集、査読無、2号、2011、1-38

⑫神谷智、「近世村落史科学」を考える、歴史評論、査読無、731号、2011、17-32

⑬渡辺尚志、近世村落史研究の課題を考える、歴史評論、査読無、731号、2011、4-16

⑭高橋美貴、幕末期の六所宮社中と神輿講中、文化財の保護、査読無、42号、2010、8-11

⑮大塚英二、山入会争論と山の小社—駿州谷稲葉村山神社の成立—、愛知県立大学日本文化学部論集、査読無、1号、2010、1-20

⑯池上裕子、中近世移行期を考える、人民の歴史学、査読無、179号、2009、1-12

⑰高橋美貴、俵物増産と海士集団の出漁—佐渡国海士町海士を事例として—、歴史、査読有、112号、2009、66-90

⑱渡辺尚志、セイフティネットとしての村、月刊自治研、査読無、598号、2009、38-45

⑲渡辺尚志、近世・近代移行期の村と地域をどう捉えるか、史海、査読無、56号、2009、66-76

〔学会発表〕(計5件)

①山崎圭、日本近世の村・地域社会—幕府領の事例—、西洋史研究会(招待講演)、2011年11月13日、立教大学

②池享、災害と歴史学、日韓歴史共同研究シンポジウム、2011年8月18日、韓国木浦大

学校(韓国)

③渡辺尚志、中世・近世移行期村落史研究の到達点と課題、日本史研究会1月例会(招待講演)、2011年1月8日、京都大学

④神谷智、右近権左衛門家と福井藩と地域社会、第8回「西廻り」航路フォーラム—北前船史料にみる右近権左衛門家—、2009年11月8日、南越前町河野総合事務所3階ホール

⑤高橋美貴、近世における回遊資源の変動と地域漁業—豆州内浦地域を事例として—、近世史フォーラム10月例会、2009年10月10日、大阪市立難波市民学習センター

〔図書〕(計25件)

①渡辺尚志、農山漁村文化協会、日本人は災害からどう復興したか、2013、241

②池上裕子、吉川弘文館、織田信長(人物叢書)、2012、328

③池上裕子、校倉書房、日本中近世移行期論、2012、442

④千賀裕太郎編集、朝倉書房、『農村計画学』(第I部1.1.4)、「農村の歴史」高橋美貴)、2012、280(12-15)

⑤菊池勇夫・斎藤善之編、清文堂出版、講座東北の歴史 第四巻 交流と環境(「一九世紀末〜二〇世紀初・魚油を通してみた日本と世界—石巻周辺地域における魚油変動を出発点として—」高橋美貴)、2012、360(285-309)

⑥渡辺尚志、草思社、武士に「もの言う」百姓たち、2012、230

⑦上川通夫・愛知県立大学日本文化学部歴史文化学科、清文堂、国境の歴史文化(「元禄十三年濃尾国境の山論に関する一考察」大塚英二)、2012、337(251-283)

⑧渡辺尚志、草思社、百姓たちの幕末維新、2012、335

⑨藤木久志編、高志書院、京郊圏の中世社会(「中世の禅定寺領について」小林一岳)、2011、372(8-60)

⑩渡辺尚志編、東京堂出版、東北の村の近世、2011、403

⑪渡辺尚志・荒武賢一郎編、岩田書院、近世後期大名の領政機構 信濃国松代藩地域の研究Ⅲ、2011、297

⑫渡辺尚志編、清文堂出版、畿内の村の近世史(「近世初期の「名寄帳」について」神谷智)、2010、324(211-228)

⑬渡辺尚志編、清文堂出版、畿内の村の近世史(「近世初期の山年貢について」神谷智)、2010、324(81-110)

⑭斎藤善之・高橋美貴、清文堂出版、近世南三陸の海村社会と海商(共編著)、2010、344

⑮池享、吉川弘文館、室町戦国期の社会構造(編著)、2010、337

⑯池享、同成社、日本中近世移行期論(単著)、

2010、324

⑰池享、吉川弘文館、戦国期の地域社会と権力（単著）、2010、336

⑱渡辺尚志、清文堂出版、畿内の村の近世史（編著）、2010、343

⑲渡辺尚志、校倉書房、村からみた近世（単著）、2010、327

⑳蔵持重裕編、岩田書院、中世の紛争と地域社会（「山野紛争と十四世紀地域社会」小林一岳）、2009、396（257-280）

㉑小林一岳、吉川弘文館、日本中世の歴史 4 元寇と南北朝の動乱、2009、265

㉒坂田聡編、高志書院、禁裏領山国荘（「近世の名主仲間と鮎漁・網株・鮎献上」山崎圭）、2009、540（349-376）

㉓池享、吉川弘文館、日本中世の歴史 6 戦国大名と一揆、2009、249

㉔渡辺尚志、柏書房、百姓たちの主張、2009、228

㉕渡辺尚志、筑摩書房、百姓たちの江戸時代、2009、175

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 尚志 (WATANABE TAKASHI)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：10192816

(2) 研究分担者

池 享 (IKE SUSUMU)
一橋大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：20134885

(3) 連携研究者

山崎 圭 (YAMAZAKI KEI)
中央大学・文学部・教授
研究者番号：60311164
小林 一岳 (KOBAYASHI KAZUTAKE)
明星大学・人文学部・教授
研究者番号：20298061
池上 裕子 (IKEGAMI HIROKO)
成蹊大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：70232171
高橋 美貴 (TAKAHASHI YOSHITAKA)
東京農工大学・(連合) 農学研究科 (研究院)・准教授
研究者番号：90282970
志村 洋 (SHIMURA HIROSHI)
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：90272434
大塚 英二 (OTSUKA EIJI)
愛知県立大学・文学部・教授
研究者番号：40201975
神谷 智 (KAMIYA SATOSHI)
愛知大学・文学部・教授
研究者番号：20283377